

幕末・明治期における播磨の漢詩人と中国文人の交遊

——河野鉄兜、亀山雲平を中心として——

石 暁 軍

一 はじめに

従来では見落とされてきた幕末における播磨の漢詩人と中国文人との交遊については、拙稿「河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊に関する新史料——姫路市林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」考」（以下は「石2013」と略称）および『林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風』詩文の著者沈浪仙（沈筠）について」（以下は「石2014」と略称）等^{注1}の中で、播磨の河野鉄兜と中国の沈浪仙（沈筠）の交遊関係については部分的に触れたが、前稿は主に新発見史料を絞って考証していたため、その交遊の詳細な状況等については展開していない。また、明治四年（一八七一）から六年（一八七三）にわたって締結された日清修好条規により両国の人物交流が再開され、中国から官僚文人や民間文人などが来日し、日中国人は初めて直接に詩文を交流する機会が到来した。それにより、明治期における日本の漢詩人達と中国文人との交遊が盛んに行われていたことは周知の通りであるが、今まで播磨地域の交流の状況に関してはあまり注目されていないのが現状である。

そこで本稿では、幕末と明治時代における播磨地域で活躍していた漢詩人の中から、林田藩校「敬業館」教授の河野鉄兜（一八二五～一八六七）、姫路藩校「好古堂」教授の亀山雲平（一八二二～一八九九）を取り上げて、幕末・明治期における播磨の漢詩人と中国文人との交遊状況の一端を考察しておきたい。^{注2}

二 幕末における河野鉄兜と沈浪仙との知られざる交遊

(1) 河野鉄兜と沈浪仙の生涯および先行研究
 先ず二人の生涯および関連する先行研究を見ておこう。

河野鉄兜(一八二五〜一八六七)は播磨国揖東郡網干村(今の兵庫県姫路市網干区)に生まれる。本名は巖(志久満。後に維巖)、通称は絢蔵、絢夫、字は夢吉、号は鉄兜、後に秀野、錦壇、祝田、霽南、晴南、秀史、秀生などの雅号もよく使用されていた。また、鉄兜を生める河野家の旧姓は南海伊豫(今の愛媛県)の名族越智氏であるため、河野鉄兜もよく「越巖」と自称していた。河合寸翁の仁寿山巖に学び、その後江戸に遊学。各地の碩学を訪ねその行脚は中国、四国、九州地方に及ぶ。一八五一年(嘉永四年)林田藩主・建部政和の招きにより、藩校敬業館の教授となる。一八六七年(慶応三年)病没。著作に『覆誓詩談』、『鉄兜遺稿』等がある。「芳野三絶」の一人として知られているほか、昭和三年(一九二八)十一月に昭和天皇の御即位の大札に際し「正五位」に贈位されたため、一般的にも知られるようになった。なお、岸田吟香(一八三三〜一九〇五)の依頼で清末中国の著名な学者である俞樾(一八二一〜一九〇六)が編集した日本漢詩総集『東瀛詩選』(一八八三年刊行、日本漢詩人五三七人、漢詩五三一九首を収録)巻四十四には河野鉄兜の漢詩七首が収録されているため、中国においても一定の知名度がある。^{注1)}

今まで河野鉄兜に関する先行研究といえば、一八九九年に刊行された『鉄兜遺稿』上巻に収録されている四屋恒之著『河野鉄兜伝』(白鷗楼刊)を嚆矢として、代表的な論著である田中真治編『鉄兜と其の交友の尺牘』(西播磨新聞社、一九二九年)や内海青湖著『詩人河野鉄兜』(龍吟社、一九三二年)には、鉄兜の交友関係や生涯について詳しく論じられているが、中国文人との交遊については皆無である。戦後、まず西播史談会の編集による『播磨』第五十九号特輯号(一九六四年九月)には、鉄兜の子・河野天瑞の「河野鉄兜伝」(一九二五年一月撰述)が公刊され、続いて八木映『河野鉄兜』(黄土社、一九七二年)、網干公民館編『播磨の花神 河野鉄兜と東馬の兄弟』(一九七八年、非売品)があり、さらに近年に、増田喜義氏の『河野鉄兜漢詩研究』(網干史談会出版部、一九九五年)には「河野鉄兜の師友門下知人交誼録」という十四ページにわたる詳細な交友リストが付録されているほか、各人物事典にも散見している河野鉄兜の伝記や関連研究が見られる。^{注2)} 前文に述べた河野鉄兜の生涯は、実際に筆者が上述した論著に

基づいて纏めたのである。ところが、以上の論著には何れも鉄兜と中国文人との交遊関係が触れられていない。

引き続きいて沈浪仙（一八〇二〜一八六二）を見てみよう。別稿（石2014）^注で明らかにしたように、沈氏は中国浙江省平湖県の乍浦に生まれる。本名は沈筠、字は実甫、号は浪仙、一般に沈浪仙と呼ばれている。浙江省平湖県で活躍していた地方文人として知られる。著書は『乍浦集詠』、『守経堂詩集』、『蜻蛉州外史』、『日本紀略』、『海上文徴』、『滄海珠編』、『大東詩録』など五七種類があったが、太平天国の戦乱（一八六一年の乍浦侵攻）で殆ど失われており、『乍浦集詠』十六卷、『守経堂詩集』十卷のみ残っている。アヘン戦争（一八四二年）の時に乍浦での戦禍やイギリス軍の暴行などを語る沈浪仙の編集による『乍浦集詠』は道光二十六年（一八四六）四月に乍浦で刊行後、同年十二月に異例な速さで『乍浦集詠』二十四部が日本に輸入され、幕府（御文庫、昌平坂学問所など）と一部の藩主が購入している。しかも間もなく伊藤圭介の抄録した『乍川記事詩』、小野湖山の抄本『乍浦集詠鈔』などの和刻本も刊行されたため、沈浪仙（沈筠）の名前は幕末の日本にもよく知られていたようである。

ところが、その後、彼の名前は世に埋もれて中国でも日本でも知られざる人物として人々に忘れさられてしまった。二十世紀六十年代後半、関西大学の大庭脩教授が江戸時代における唐船持渡書すなわち漢籍の輸入という問題を研究された際、沈浪仙（沈筠）の『乍浦集詠』が言及されていることにより、沈氏の名前は再び注目されるようになり、近年になると、沈浪仙と高松・長崎の文人との交遊に関する研究も現れているが、沈浪仙と河野鉄兜の交遊についての研究は依然として皆無である。

（2）河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊関係

ところが、実際には河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の間に交遊関係があったようである。このことを裏付けられる史料としては、先ず鉄兜の息子である河野天瑞により編集され、一八九九年に刊行された河野鉄兜の著作集『鐵兜遺稿』を取り上げることができる。その『鐵兜遺稿』には、少なくとも下記の二点の証拠が見られる。

その一に、『鐵兜遺稿』下巻に次の詩文が収録されている。^注

秀野越先生書來、知手輯貴邦詩綜千餘卷、以雲濤萬里未得同商為憾。更示大著、

讀竟題後、以誌傾倒。

沈筠 清國

霞邊想像選樓高

撰述頻年不憚勞

七道文章供月旦

一時壇坫主風騷

古今談藝天無外

湖海論交氣自豪

有願扶桑同濯足

與君吟嘯策靈龜

右の詩文の署名から、沈筠すなわち沈浪仙の作品であることが分かるほか、序文（詩の最初の説明文字）によれば、沈浪仙（沈筠）は、「秀野越先生」＝河野鉄兜からの書簡を頂いて、鉄兜が「貴邦詩綜千餘卷」即ち千巻以上に構成される予定の日本詩総集を編纂していることを知り、更に鉄兜より寄贈された「大著」をも読んでの敬服と感慨を述べるため、唱酬として鉄兜あてに送っているわけである。

この唱酬詩の第一句「霞邊想像選樓高」の「選樓」とは文章等を編集する場所であり即ち鉄兜の書齋を指し、第一句と第二句の「撰述頻年不憚勞」と合わせて、鉄兜が長年に勞をいとわず書齋で著述していることを想像している。その上で第三句の中の「七道」が五畿七道の略であり「七道文章」とは日本全国の詩文を指し、また「月旦」とは「月旦評」の省略で即ち人物や作品批評のことを意味し、第四句の「主風騷」とは文壇で指導的地位にあるという意味のため、前四句は、明らかに鉄兜が日本の詩壇をリードし、日本漢詩総集を編纂していることを讃えているのである。詩の第五句から第八句は沈浪仙（沈筠）と河野鉄兜との交誼を詠じているが、第七句の「扶桑」とは日本の代名詞であり、「濯足」とは遠い旅から人を招くことを指しており、第七句と第八句は浪仙が鉄兜に会って直接に交流したいという気持ちを詠じている。上述した表現から見れば、二人はまだ直接に会っていないが、詩文の唱酬等の交遊がよく行われていたことが分かる。

鉄兜の少年時代の恩師である秦其淵（はら）によれば、確かに河野鉄兜が天智朝から近世までの『聖朝詩史』を編纂するという計画があったようであるが、残念ながら最期までにも脱稿に至らなかつた。上述した沈浪仙（沈筠）の詩文からみれば、鉄兜が沈浪仙に送った書簡の中で自分の進行中の編纂計画を沈氏に知らせたのである。このことは実に意味深く、十分に二人の親密な交友関係を物語ることができる。

その二に、『鐵兜遺稿』上卷には「讀先得月樓遺稿」という詩があり、

讀先得月樓遺稿

| | |
|---------|---------|
| 質衣賈繻半供姑 | 當代淑儀推女儒 |
| 夜月有懷迷地下 | 春風無主向堂隅 |
| 鴛鴦不上全機錦 | 咳唾翻成一集珠 |
| 好把殘毫傳美事 | 為君畫出課兒圖 |
| 空賦新詩寄斷腸 | 瓣香珍重帶經堂 |
| 破廚春雨晨炊冷 | 殘壁秋燈夜讀長 |
| 不道亡人無福祿 | 但期孤子有文章 |
| 應須含笑歸深土 | 東海諸生識令郎 |

とある。^{注九}

言うまでもなくこの「讀先得月樓遺稿」(「先得月樓遺稿を読む」)は鉄兜の作品であるが、この詩に取り上げられている『先得月樓遺稿』とは、実に沈浪仙の母親である朱蘭の詩文集である。前稿(石202)^{注一〇}で述べたように、沈浪仙の母親である朱蘭は当時の女性の女性の中で非常に珍しくて、一般の読み書きのみならず、女流詩人としても知られている。浪仙が生まれた直後に父親(沈晋儒)を失ったため、十四歳までの教育は母親(朱蘭)の指導を受けていた。その後母親の朱蘭も亡くなったが、その遺稿集が『先得月樓遺詩』(別名は『繡餘漫詠』)という書名で刊行されたのである。

従って、右掲した詩は、実に河野鉄兜が沈浪仙の母親の遺稿集を読んだ後の感想である。紙幅の関係で、ここには一々この十六句からなる詩の内容を解説しないが、全体的に言えば、その主な内容は沈浪仙の母親が如何に苦しみ耐え抜き浪仙を育てていたことや遺稿集に対する河野鉄兜の感慨や称賛である。詩の最後「應須含笑歸深土」(微笑んで深い土に戻るべし)安らかにお眠りあらんことを、「東海諸生識令郎」(東海の諸生がご令息知っている)日本の文人達がみなご令息の文名を知っている)という句は、明らかに沈浪仙を称えている。一方、沈浪仙の立場から見れば、母親の朱蘭は単に一般的母親だけでなく、また自分の啓蒙の恩師でもある。このような母親の遺稿集を贈ることが出来る対象としては、よほど親しい交遊関係をもつ人でないと、難しいであろうと思われる。

上述した『鐵兜遺稿』の記事のほか、もう一つの重要な史料は筆者が二〇一二年十月に「敬業館講堂」(姫路市林

田)において新たに確認できた「林田敬業館河野鉄兜筆六曲屏風」である。

河野鉄兜の揮毫によるその六曲屏風の内容が、実に沈浪仙より落合雙石、広瀬淡窓、劉石秋、河野鉄兜宛に出した公開書簡であることおよび屏風の詳細の内容については、別稿(石2013)を参照されたいが、一言でいうと、その「林田敬業館河野鉄兜筆六曲屏風」詩文(以下は「屏風詩文」と略称)の主な内容は、沈浪仙の日本の漢字や漢詩の発展と変化に関する論評であり、また日本の漢詩人達に対する評価でもある。

沈浪仙が日本の漢詩界や漢詩人の評価を主旨とするこの屏風詩文を執筆した際に、鉄兜の日本漢詩総集の編纂計画を念頭に置いていたようである。というのは、その屏風詩文の第三十五句に、沈浪仙が「秀野一鶴警秋露」という表現があり、この「秀野」は言うまでもなく河野鉄兜のことで、「一鶴」とは「鷄群の一鶴」の省略であると考えられる。また「秋露」とは「秋の露」の意味のほか、梁の江淹『別賦』に「秋露如珠」という句を嚆矢に、その後の詩文の中でよく「真珠」の喩えとして使われているほか、前稿(石2013)で言及したように、沈浪仙はよく真珠で日本の漢詩を譬えており、自ら編集した日本漢詩集の題名を『滄海珠編』と命名したわけがある。したがって、沈氏の「秀野一鶴警秋露」は実にとても高く河野鉄兜を評価している。すなわち河野鉄兜が「鷄群の一鶴」のような、日本の漢詩界を驚かせる非凡な存在である、と讃えている。

この屏風については、もう一つ注目して頂きたいことがある。すなわち鉄兜が沈浪仙の詩を屏風に揮毫した慶應二年(一八六六)十一月は、彼がこの世を去る慶應三年(一八六七)二月六日の二カ月前のことであった。絶筆ではなくても最後の遺作の一つではなからうかと思われる。かなり親密な交友関係がなければ、このようなことがなかったであろう。

要するに、従来の研究において見落とされている上述した史料からみると、河野鉄兜と沈浪仙(沈筠)との間に文通や詩文で結ばれた親密な交遊関係があったことが分かる。

三 明治期における亀山雲平と神姫滞在の中国文人たちの交遊

(1) 亀山雲平の生涯および先行研究

河野鉄兜と同じ時期に播磨で活躍していた漢詩人の中には、「播磨聖人」と称されていた亀山雲平（一八二二—一八九九）という人物もいた。

従来、亀山雲平の生涯と事績に関する史料は非常に少ない。管見の限りに彼の伝記についての資料は、関儀一郎・関義直共編『近世漢学者伝記著作大事典 附系譜年表』（井田書店、一九四三年）第一七〇頁に収録されている二行からなる簡単な紹介のほか、実物史料として雲平の死後の明治三十六年（一九〇三）に南摩綱紀により書かれた「節宇亀山先生墓碑銘」（姫路市端松山景福寺内）と大正三年（一九一四）に股野琢により篆額、三島毅により碑文、湯川亨によって揮毫された「節宇亀山先生遺蹟之碑」（姫路市白浜町・松原八幡神社内）がある（後に二つの碑文はともに活字の形で亀山雲平の遺族（養孫）である亀山茂里によって刊行された三卷からなる『節宇遺稿』の上巻の巻頭に収録されている^{注三}）。その後、姫路市民の有志によって一九八九年に設立された「亀山雲平顕彰会」の様々な顕彰活動があり^{注三}、また近年以来、姫路にある播磨学研究所も関連する研究を行われているようである^{注四}。さらに最近、中嶋裕子と中島友子両氏が一連の論考を発表され、姫路市飾磨区都倉にある中島家の倉庫から発見された碑文の原稿資料等と碑の実物を対照しながら碑文の内容を検証されている^{注五}。これらの研究により亀山雲平の生涯と事績は徐々に明らかになってきた。

上述した史料と先行研究によれば、亀山雲平は、一八二二年（文政五年）一月二十日、姫路の五軒邸で姫路藩士亀山百之と頼家の次男として生まれた。名は初め恭吉、後に美和、字は由之、号は曳庵、節宇、通称は敬佐、源五右衛門、雲平である。青少年時代は前後にして藩校好古堂、河合寸翁が開いた仁寿山巖、さらに江戸の昌平黉（昌平坂学問所）で修学し、姫路藩士、儒学者、姫路藩校「好古堂」教授として活躍していた。河野鉄兜の幕末だけでの活躍とは違い、亀山雲平は明治以降も続けて活躍し、明治六年（一八七三）に姫路の松原八幡神社の祠官となり、境内に「久敬舎」^{注六}という書院（一八八四年に「観海講堂」と改名）を開いて学問を講じることとした。明治三十二年（一八九九）七十八歳での病死までに、雲平が「久敬舎」と「観海講堂」で後進の指導に尽くしており、多くの人材を世

に送り出したため、地元から「播磨聖人」と称されていたのである。雲平の著作として前述した遺稿集『節宇遺稿』三巻以外は、また『新撰標註純正蒙求校本』三巻（一八八三年刊）、『日本国体一斑』二巻（一八八三年刊）、『皇朝百家絶句』三巻（一八八五年刊）などが残っている。

前節で述べた河野鉄兜と同じように、亀山雲平は、実に明治時代に来日し神戸や姫路に滞在していた中国の文人たちとの間に色々な交遊があったようであるが、前述した先行研究には、これについて全く言及されていない。それゆえ、本節では関係資料に基づいてこの方面の状況を考察していきたい。

(2) 亀山雲平と神姫滞在の中国文人との交遊

一八七三年（明治六）に日清修好条規の締結以降、中国から外交官や民間文人などが続々と来日し、神戸をはじめ関西各地については、一八七八年（明治十一）中国の駐神戸理事府の開設に伴い、多くの中国文人達が関西に訪れてきた。明治時代に神戸や姫路に訪れて滞在していた中国文人のうち、複数の人が亀山雲平と交遊と詩文の交流があったと見られる。下には幾つかの事例を取り上げる。

(A) 陳慕會（陳雨農）との交遊

亀山雲平『節宇遺稿』巻下には次の詩文が収録されている。注一七

和清人陳雨農所似韻卻寄並序

九月十六日余偶遊神山、雨農陳君以一詩來聞訊、未暇答。十八日、君訪余於耕南家、始獲面晤。席間又贈句三章、時筆談正暢、亦未暇答也。次日、余匆匆返里、歸程至須磨舞妓之間、重檢閱所贈諸什、沿途次第和之、至家後重閱一過、即以答。三首節一。

斯人恰與古賢均 一見才情愜素聞

鑽則彌堅真實學 博而能約豈虛文

醉吟半夜同紅燭 別恨多年隔白雲

若遇鄉朋先說道 神山高客是陳君

右の詩文は明らかに亀山雲平が中国文人陳雨農と唱和したものである。詩の序文から見れば、雲平が九月十六日に陳雨農から詩を頂いたが、あいにく神戸への外遊していたため、返答できなかった。九月十八日に二人は初めて耕南（神戸在住の姫路出身の漢詩人水越耕南）の邸宅で会って、再び陳雨農から詩三章を贈られたが、その場も時間がなくて唱和ができなかった。翌日、姫路に帰る途中に須磨において、雲平がもう一度陳氏の詩を読んでから、陳氏の詩韻を踏んで唱和詩を三首作った。ここに掲載されているのがその内の一首である。この詩の中では、雲平が陳雨農の詩と才能を讃えたほか、第五・六句の「醉吟半夜同紅燭、別恨多年隔白雲」のように、二人が深夜まで酒を飲んで詩を吟詠し意気投合しており、早く会わなかったことを恨んでいるという気持ちを表している。

ここに取り上げられている陳雨農は、明治前期に來日した中国の民間文人の一人である。陳雨農の生涯についての史料としては、陳氏と密接な交友関係を持つ漢詩人である水越耕南が編集した『翰墨因縁』^{註一八}の中の簡略の紹介記事がある。それによると、陳雨農の本名は陳壽曾で、雨農または雨澂は彼の字であり、号は紅蓮館主人である。陳氏の本籍は浙江省嘉興府であるが、客籍は広東省広州府である。

陳雨農は民間文人として詩文に堪能であり、水越耕南や股野藍田など多くの日本漢詩人と交遊関係を持っていた。陳氏の生年と卒年、経歴、^{註一九}又はいつ來日した等の状況が何れも不明であるが、一八八三年頃に神戸、その後東京に住していたようである。

前述した亀山雲平と陳雨農が水越耕南邸で出会った時期は九月十八日のみになっており、年代については明記していないが、陳雨農の神戸滞在は一八八三年頃のことを合わせて考えれば、二人の出会いは一八八三年九月十八日であろうと推定できる。

亀山雲平と陳雨農の交遊は、その以降も続いていたようである。たとえば、一八八四年に、陳雨農は雲平と水越耕南が共同で編集された『皇朝百家絶句』（一八八五年刊）のために序文^{註二〇}を執筆した。また、亀山雲平『節字遺稿』^{註二一}卷下には、雲平が陳雨農宛てに出した左記の唱和詩が収録されている。

以韻陳雨農哭胡少蘋七律五首並序

雨農陳君有哭胡少蘋七律五首、見郵寄、誦讀數過。乃悼胡翁之一逝難再起、又感陳君吊哭之懇至也。因不自揣、各次其韻、更述哭翁之懷。

滿腹文章元絕塵
致芻今日黃泉客
未趁煙霞同謝屐
花如含淚鳥如哭
東瀛幾度託羈身
問字當年青眼人
纔將詩酒共陶巾
誰使小雷離大陳

雲慘風悲西海頭
多年客跡留新稿
掛壁墨痕香可掬
夢魂彷彿神山夕
斯人一去筆應休
一片鄉心首故邱
藏篋詩句淚難收
醉與先生話舊遊

遺篇幾帙有精神
坐上春風能誘我
傾河愁淚無由拭
一首祭文毫又澀
何事仙遊乘白雲
門前冬雪未陪君
埋玉凶音不忍聞
強呼樽酒假微醺

先生行義我邦諳
官路英名天不假
文章總本經書六
安定後嗣今厭世
聞訃人人欲說驂
藝園美跡眾皆談
交誼尤宜益友三
德於祖考合無慚

曾移吟榻請君憑
今日悲場本娛境
窗梅花好墳前薦
屈指春風兩度經
當時會館即離亭
林鳥聲應地下聽

右の五首の唱和は、亀山雲平が陳雨農から郵送されてきた「哭胡少蘋」（胡少蘋を哭す）という五首の七律詩を読んで、陳氏の詩韻を踏んで作成した唱和詩である。紙幅の關係でここに詩の詳細を解説し尽くせないが、総じて言えば、この唱和詩の主旨は、亡くなった共通の友人である胡少蘋を偲ぶものである。後述するように、胡少蘋の没年については一八八五年頃に推定できると考えるので、亀山雲平と陳雨農の交遊が少なくともそのあたりにも続いていたかと考えられる。

要するに、上述した幾つかの断面だけでも亀山雲平と陳雨農との親密な交友關係が窺えるのではなからうかと思う。

(B) 胡震（胡小蘋、胡小萍、胡少蘋）との交遊

前文に少し触れたように、亀山雲平と交友關係をもっていた明治期に來日した中国文人の中で、また胡震（胡小蘋、胡小萍、胡少蘋）という人がいた。水越耕南編『翰墨因縁』の下巻には、胡震の詩文（詩十三点、文二点、尺牘二点）が収録されており、その文頭に胡氏について簡単な紹介があり、

胡震、字小蘋、號笑萍、寧波府鄞縣人。^{注二}

右の記事とほかの史料（後述）とを合わせて見れば、胡震の人物像がだいたい分かる。即ち胡震の字は小蘋、または小萍・少蘋であり、号を笑萍と称し、浙江省寧波府鄞県出身の人である。胡震（胡小蘋）は詩文に堪能すると知られているが、実に彼は明治前期に來日した中国寧波商人のリーダ格の一人でもある。蔣海波氏の研究によれば、胡震（胡小蘋）は商社晋記号の号主（筆頭株主兼経営者）として一八七一年頃に來日し、翌年にも寧波商人のまとめ役である「浙寧商号總管」の身分をもって、兵庫県に「寧幫各号人数籍貫姓名單」を提出したことがある。^{注三}

胡震（胡小蘋）は神戸在住の水越耕南等の漢詩人と親密な文芸交流が行われていたのみならず、また癸未（一八八三年）春に姫路を遊歴し、数か月間に姫路の書肆・栽培堂に下宿していたことがある。姫路に滞在中に、胡震（胡小蘋）は高槻藩士・漢詩人藤井竹外（藤井啓、一八〇七〜一八六六）の詩集『竹外廿八字詩』を読んで全詩に批評を加えて、『竹外廿八字詩評本』という書名で明治十六年（一八八三）十月に栽培堂主人（播磨国飾東郡姫路米田町 本

莊千代平註四より刊行された際に、龜山雲平がわざわざ序文を撰して上述した経緯を紹介し、次のように述べている。

余未接藤井竹外翁之風貌、又未誦其一家詩集也。然嘗得近世名家絕句者讀之、觀翁二絕以知其志既已久矣。

(中略) 今茲癸未三月清人少蘋胡先生來吾姫路、寓書肆栽培堂、會見翁此集邂逅手之、且誦且批、主人付之劊劊、

而諸名家又有題詞。(下略)

明治十六年七月節宇龜山雲平拜撰于姫路城南白濱村寓樓南軒下

(下線は何れも引用者が付けたものである。以下同。一石)

右の龜山雲平の序文には、いつ「清人少蘋胡先生」≡胡震(胡小蘋)と出会ったのかについて述べていないが、胡震と水越耕南との親密な交友関係、および後日に雲平が胡震を偲ぶ詩句「夢魂彷彿神山夕、醉與先生話舊遊」(後述)からみると、胡震(胡小蘋)が姫路に来る「癸未三月」すなわち一八八三年(明治十六)三月以前に、雲平が既に水越耕南を通じて神戸在住の胡震(胡小蘋)と知り合ったのではないかと推測できる。

関係資料を総合的に検討すると、胡震(胡小蘋)の姫路滞在期間は一八八三年春三月から初夏までであったと推定できる。姫路滞在中に胡震(胡小蘋)は、きつと頻繁に雲平をはじめとする姫路の漢詩人達と詩文の磨き合い等の文芸交流が行われていたに違いないと考えられる。というのは、雲平の好古堂時代の同僚であり姫路の漢詩人である松平惇典(一八二五―一八八八)が『竹外廿八字詩評本』のために書いた序文の中では、胡震(胡小蘋)の姫路滞在中に、松平惇典が毎日に必ず胡震と会って詩文について討論していたと書かれている。おそらく龜山雲平も同じであろうと思われる。この点については、前文に引用した龜山雲平の「以韻陳雨農哭胡少蘋七律五首並序」(陳雨農の韻を以て胡少蘋を哭す七律五首)という唱和詩からも窺える。

例えば、「以韻陳雨農哭胡少蘋七律五首並序」の第一首の前四句「滿腹文章元絕塵、東瀛幾度託羈身。致芻今日黃泉客、問字當年青眼人。」を例として、いうまでもなく「滿腹文章元絕塵」の句は胡震(胡小蘋)の博学多才を讃えており、「問字當年青眼人」の「青眼人」とは「氣の合う友人」の意味なので、ここでは明らかに雲平と胡震との詩文唱和などの様子を言っている。

また、第二首の後四句「掛壁墨痕香可掬、藏篋詩句淚難收。夢魂彷彿神山夕、醉與先生話舊遊」とは、すなわち雲

平が「掛壁墨痕」一 雲平自宅の壁に掛けられている胡震の墨跡や「藏篋詩句」二 大切に保存している胡震の詩句を見て思わず涙が出てきて、夢中の魂があたかも「神山」三 神戸の夜に戻っており、酒宴の席で胡震と在りし日の交遊を語っているようである、と述べ表している。

さらに、第五首最初の二句「曾移吟榻請君憑、屈指春風兩度經」のなかで、雲平は、かつて胡震の「吟榻」四 詩を吟ずるところへ行って教示を請っていたが、指折り数えてみると、それ以来も二度の春風五 二年の歳月を経ていた、と感慨無量の心境を表している。ちなみに、右に取り上げた詩句から見れば、胡震（胡小蘋）がこの世を去ったのは、姫路に滞在していた二年後、即ち一八八五年のことであろうと推定できる。

要するに、上述した諸詩句は、雲平と胡震（胡小蘋）が交遊関係を持っていたことを物語っている。また諸詩句からみれば、二人の交遊時期は主に一八八〇年代の前半期であったことも分かる。

(C) 衛壽金（衛鑄生）、および廖錫恩（廖枢仙）・黎汝謙（黎受生）との交遊

前述した陳慕曾（陳雨農）や胡震（胡小蘋）のほか、『節宇遺稿』巻下に収録されている次の詩があり、

贈清客衛鑄生 次其原韻

姬城到處總塵寰 唯恐名賓促駕還

投轄吾情深似海 誘人君德峻如山

風流翰墨迎元白 史傳文章得馬班

播嶺春光登覽日 奉將几杖共躋攀

とある。注八 この唱和詩の対象である「清客衛鑄生」も明治期に來日した中国の民間文人の一人である。水越耕南編

『翰墨因縁』の下巻には、衛氏の詩三点と尺牘三点が収録されているほか、彼について次のように紹介されている。注九

衛壽金、字鑄生、號頑鋏道人。江蘇省蘇州府常熟縣人。

即ち鑄生は衛氏の字であり、彼の名は衛壽金、号は頑鋏道人といい、江蘇省蘇州府常熟縣出身の人である。いままでの研究によると、衛壽金（衛鑄生）は書家として知られているほか、詩文にも堪能していたという。一八七八年頃に衛壽金（衛鑄生）が來日し、関西各地や四国の高松等に遊歴し、一八八六年（明治十九）春に姫路にも滞在していた

注三〇 上掲した唱和詩の最初の「姫城到處總塵寰、唯恐名資促駕還」(姫路のいたるところの人間は、ただ「名資」^{注三〇} 著名な賓客が帰ることのみ恐れる) というような誇張の表現から見れば、この詩は、間違いなく衛壽金(衛鑄生)が姫路に遊歴していた時に、亀山雲平より衛氏に贈った唱和詩である。衛壽金(衛鑄生)より贈られた原詩が残っていないが、雲平のこの詩だけを通じて二人の交遊ぶりが窺える。

上述した民間文人のほか、亀山雲平はまだ中国の官僚文人に清朝駐神戸理事府(領事館)の外交官たちとの間にも交遊があったようである。例えば、水越耕南編『翰墨因縁』上巻には、一八七九年二月から一八八二年五月にかけて神戸理事府の第二代目の理事官(領事)として在任していた廖錫恩(一八三九〜一八八七、字は枢仙、号は子曰亭主人、広東省博羅県出身)^{注三一}の多くの詩文や書簡が収録されている。その内に、廖錫恩が水越耕南の要請で『萍水相逢』という詩集のために書いた序文も含まれているが、廖氏の序に関する亀山雲平の評注も同時に収録されている。^{注三二}

周知の通り、『萍水相逢』は、讃岐出身の漢詩人である赤松渡(号は椋園、一八四〇〜一九一五)が編集したが、その中身としては、片山冲堂(一八一六〜一八八八)、亀山雲平、藤澤南岳(一八四二〜一九二〇)、水越耕南(一八四九〜一九三三)および赤松椋園の五名の漢詩人の作品が収録されている漢詩集である。^{注三三}すなわち、廖錫恩が亀山雲平の作品を含むこの漢詩集のために序文を執筆したが、また雲平が廖氏の序文について評注をつけたわけである。廖錫恩の「萍水相逢巻序」によれば、廖は亀山雲平と面識がなかったので、二人の交遊は全く文字で結ばれた交遊関係とも言えよう。

また、亀山雲平の『日本国体一斑』の扉ページには、次のように、

文献足徴

節宇先生撰日本国体一斑、刻成介水越耕南属余題巻首、書之報命。

癸未七月 遵義黎汝謙

と書かれている。^{注三四}すなわち亀山雲平は自著『日本国体一斑』の扉ページの題字について、水越耕南を通じて黎汝謙に依頼したところ、「癸未七月」すなわち一八八三年七月に黎汝謙が亀山雲平の著書に「文献足徴」(文献徴するに足る)文献によって立証される)という題字をしたのである。

ここに取り上げられた執筆者の黎汝謙(一八五二〜一九〇九)も神戸理事府の理事官(領事)を務めた官僚文人で

ある。黎汝謙の字は受生、または寿生・受蓀・俊生、号は半溪生、貴州省遵義の出身であり、一八八二年十月から一八八五年一月まで第四代目の理事官（領事）として在任していた。亀山雲平と黎汝謙の間ほどの程度の交遊していたのかについては、史料の欠如で分からないが、上掲の題字のほか、翌年（一八八四年）に刊行された亀山雲平・水越耕南共編『皇朝百家絶句』の書名も同様に黎汝謙の題字であるということから見れば、亀山雲平と黎汝謙の間には、少なくとも前述した廖錫恩と同じように、詩文等による交流があったと思われる。

四 むすびにかえて

上述した十九世紀後半の播磨における代表的な二人の漢詩人と中国文人と交遊の有様を通じて、幕末・明治期における播磨の漢学の側面が明らかになってきた。

述べたところをまとめてみると、少なくとも次の二点の結論が得られたと思う。

第一に、幕末までに活躍していた「芳野三絶」と称される播磨の漢詩人・林田藩校「敬業館」教授の河野鉄兜と同時代の中国浙江省の詩人・沈浪仙との交遊関係を追跡した結果、今まで知られざる二人の交遊関係が明らかになってくると同時に、従来のイメージⅡ江戸時代において長崎を除いて日中文人の交流があまりなかったという通説とは違ひ、幕末の漢詩人、なかでも播磨のような地方の漢詩人でさえも中国文人と様々な交流をしていたことも明らかになった。

第二に、主に明治時代前半に活躍していた「播磨聖人」と称され、姫路藩校「好古堂」教授であった漢詩人亀山雲平と明治以後に來日した中国の文人たちとの交遊の検証を通して、明治以降に流行っていた日中文人の間に漢詩の唱和など直接の交遊は、東京や京阪神などの大都会のみならず、播磨のような地方でも行われていたことがわかった。

上述したことについては、さらに播磨出身かつて龍野藩校「敬業館」教授を務めており、後に上京し帝室博物館初代館長等を歴任した股野藍田（一八三八〜一九二二）と中国文人との交遊、および姫路藩校「好古堂」で学び、後に神戸で活躍していた漢詩人である水越耕南（一八四九〜一九三三）と中国文人との交遊を合わせて考えれば、幕末・明治期における播磨の漢学の有様に対する再認識を必要があるのではなからうかと思う。これについては今

後の課題として引き続いて検討しておきたい。

※本稿は姫路獨協大学特別研究助成（二〇一四年度）による研究の一部である。謹んで謝意を表す。

【注】

注一 拙稿「河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊に関する新史料―『姫路市林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風』考―」（『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二六号、二〇一三年三月）、同「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」詩文の著者沈浪仙（沈筠）について」（『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二七号、二〇一四年一月）、同「清末中国研究 日本的先駆者沈筠事績考」（『浙江工商大学学报』二〇一四年第二号「総第二二五号」、二〇一四年三月）を参照。

注二 本稿の一部の内容は、平成二十四年度「林田藩校 敬業館講座」（二〇二二年十月十三日・二十日、姫路市教育委員会主催）において口頭で公開した。

注三 兪樾編『東瀛詩選』（一八八三年、杭州）巻四十四には「短歌十首寄頼子春」（節五）、「失題二首」という河野鉄兜の漢詩七首が収録されている。なお、『東瀛詩選』については佐野正巳編による汲古書院の影印本（汲古書院、一九八一年六月）と高島要編『東瀛詩選 本文と総索引』（全二冊、勉誠出版、二〇〇七年二月）というテキストもある。

注四 例えば略伝としては関儀一郎・関義直共編『近世漢学者伝記著作大事典 附系譜年表』（井田書店、一九四三年）第一七九頁に収録されている「河野鉄兜」条のほか、また森銑三「河野鉄兜」（『森銑三著作集』続編第二巻、二二六九〜二七二頁、中央公論社、一九九二年）、平松勘治「河野鉄兜」（同氏編『長崎遊学者事典』一六九〜一七〇頁、溪水社、一九九九年）、寺林峻「河野鉄兜」（同氏編『播磨百人伝』二二二〜二二三頁、神戸新聞総合出版センター、二〇〇一年）がある。なお近年の河野鉄兜に関する研究としては徳田武著「河野鉄兜の九州紀行」（『江戸風雅の会』『江戸風雅』第四号、二〇一一年）、田村祐之著「河野鉄兜の中国・九州遊学の道筋について―四国・備前・備中―」（富田志津子ほか『播磨の文化・文学の側面―林田・敬業館にて―』所収、十五〜二十九頁、姫路獨協大学特別

研究助成、二〇一二年一月) および同氏「河野鐵兜の四国・中国旅行の旅程について―その再構成の試み―」(『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二十七号、二〇一四年一月) があるが、何れも河野鐵兜と中国文人の交遊を取り上げられていない。

注五 前掲拙稿「『林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風』詩文の著者沈浪仙(沈筠)について」(『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二十七号、二〇一四年一月)、同「清末中国研究日本の先駆者沈筠事績考」(『浙江工商大学学报』二〇一四年第二号[総第一二五号]、二〇一四年三月) を参照。

注六 徳田武著「山田梅村と沈筠・賀鏡湖・王克三」、同氏『近世日中文人交流史の研究』(研文出版、二〇〇四年) 所収。第三七四―四〇三頁、亀田一邦著「沈浪仙の和詩収集と長崎文人―福地荷庵『蕉稿』とその周辺」、同氏『幕末防長儒医の研究』(知泉書館、二〇〇六年) 所収。第三〇一―三三三頁を参照。

注七 河野天瑞編・河野鐵兜著『鐵兜遺稿』下巻・付録の第六十六丁を参照。

注八 前掲『鐵兜遺稿』下巻・付録の第十七丁に収録されている秦其淵「送越君夢吉遊鎮西序」に「夢吉將編聖朝詩史、自天智朝至近世、其間之作者、不遺一人。」とある。

注九 前掲『鐵兜遺稿』上巻第六十二丁を参照。

注一〇 前掲拙稿「『林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風』詩文の著者沈浪仙(沈筠)について」(『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二十七号、二〇一四年一月) を参照。

注一一 前掲拙稿「河野鉄兜と沈浪仙(沈筠)の交遊に関する新史料―『姫路市林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風』考―」(『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二十六号、二〇一三年三月) を参照。

注一二 亀山雲平著・亀山茂里編『節字遺稿』第一巻第一―四頁(節字遺稿出版事務所発行、一九一七年七月、非売品) を参照。

注一三 姫路の企業家・郷土史研究家でもある長野哲氏を代表とする「亀山雲平顕彰会」は、一九八九年から一九九六年の間に会報『青松白沙』全七号が発行された。『青松白沙』は紙媒体以外、<http://nagano21.com/blog/> にも公開されている。

注一四 播磨学研究所は一九八八に姫路で設立された播磨の総合研究を進めていく研究機関である。研究拠点が前後に

して姫路市文化センター、姫路獨協大学、および現在の兵庫県立大学に変わった。播磨学研究所の機関紙『播磨学報』第十九号（二〇一三年三月）第六、九頁の「播磨学のあゆみ」によると、二〇〇九年六月より、当研究所の中で「亀山雲平手記を読む会」という研究会が発足された。また『播磨学報』第十八号（二〇一二年三月）第一頁には「亀山雲平手記を読む会」の研究活動の概要についても紹介されている。

注五 中嶋裕子・中島友子「郷土史の考察：―播磨史と亀山雲平の生涯」（『近畿福祉大学紀要』第八卷第一号、二〇〇七年）。同「播磨聖人亀山雲平―節宇亀山先生遺蹟之碑にみる雲平の思想と人柄」（『近畿福祉大学紀要』第九卷第一号、二〇〇八年）。中島友子・中嶋裕子「節宇亀山先生墓碑銘に関する一考察―墓碑銘から読む亀山雲平の業績と人柄」（『近畿福祉大学紀要』第十卷第二号、二〇〇九年）を参照。ただ中嶋氏と中島氏の論文は、前述した『節宇遺稿』に収録されている二つの碑文のことを全然触れられていない。

注六 「久敬舎」の名称は「論語」の「子曰、晏平仲、善与人交、久而敬之」に由来する。

注七 前掲亀山雲平『節宇遺稿』巻下四十丁「和清人陳雨農所似韻却寄並序」を参照。

注八 播磨水越耕南編集『翰墨因縁』（船井弘文堂（名山館蔵版）刊、一八八四年（明治十七）下巻第二十六丁「陳慕會」条を参照。

注九 陳雨農と水越耕南との交遊については、蔣海波「明治前期東亞文化交流の一側面―漢詩人水越耕南の交友を中心に―」（『関西文化研究叢書十二『東アジア三国の文化―受容と融合―』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、二〇〇九年三月）を参照。

注一〇 『皇朝百家絶句』序には、「偶遊神山、吾友播磨水野耕南君出此編示余、乃君與其尊師龜山節宇先生所合選『皇朝百家絶句』也。…大清光緒甲申上巳、紅蓮館主人陳雨農序於神山旅次」とある。

注一一 前掲亀山雲平『節宇遺稿』巻下四十丁「以韻陳雨農哭胡少蘋七律五首並序」を参照。

注一二 前掲水越耕南『翰墨因縁』（一八八四年刊）下巻第一丁「胡震」条を参照。

注一三 前掲蔣海波「明治前期東亞文化交流の一側面―漢詩人水越耕南の交友を中心に―」を参照。

注一四 「竹外廿八字詩評本」全四冊、表紙に「日本藤井啓土著、清国胡震小蘋評、版權免許 武書房蔵」、奥付に「明治十六年十月刻成納本、評注人清国人胡震、出版人本莊千代平（播磨国飾東郡姫路米田町）」とある。

注五 前掲『竹外廿八字詩評本』上巻、龜山雲平序を参照。

注六 『竹外廿八字詩評本』上巻、龜山雲平序、松平惇典序、胡震跋を参照。

注七 『竹外廿八字詩評本』上巻、松平惇典序を参照。松平惇典序には、次のように「今茲春清國胡小巖先生來寓于播之姬城、與余詩文討論無虛日、不可遇耳遇、不亦奇乎？先生間批竹外兩集、且評且批、書諸顛頭。於是竹外之詩其倍價幾何也。栽培堂主人更上梓公世。（下略）明治十六年歲在癸未肇秋 乾坤一腐儒棗山松平惇撰」とある。

注八 前掲龜山雲平『節宇遺稿』巻下四十二丁を参照。

注九 前掲水越耕南『翰墨因縁』（二八八四年刊）下巻十五丁、十七丁を参照。

注一〇 衛壽金（衛鏘生）の生涯については王宝平『清代中日学術交流の研究』（汲古書院、二〇〇五年）第一章「明治前期に來日した中国文人考」の第二節、および前掲蔣海波論文を参照。また、衛壽金（衛鏘生）の神戸・姫路への遊歴に関する史料としては『神戸又新日報』明治十九年四月二十一日四面・六月四日四面を参照。

注一一 廖錫恩については前掲蔣海波論文、また柴田清繼・蔣海波「水越耕南と清国文人との文藝交流―清国駐神戸理事府初代・第二代の外交官を中心として」（武庫川女子大学大学院文学研究科『日本語日本文学論叢』第五号、二〇一〇年）を参照。

注一二 『翰墨因縁』上巻第一丁、第二丁に収録される廖錫恩「萍水相逢巻序」および龜山雲平の評注を参照。

注一三 『萍水相逢』の内容に関する詳しい研究については、柴田清繼・蔣海波「水越耕南と『萍水相逢』―併せて萍水吟社について」（『武庫川女子大学紀要』（人文・社会科学）第五七号、二〇〇九年）を参照。

注一四 龜山雲平『日本国体一斑』扉頁（五車堂刊、一八八三年九月）を参照。

注一五 前掲柴田清繼・蔣海波「水越耕南と清国文人との文藝交流―清国駐神戸理事府初代・第二代の外交官を中心として」を参照。

注一六 漢詩文に堪能する股野藍田の著作『介壽集』（一八八五）、『葦杭遊記』（一九〇八）、『邀月樓存稿』（一九一九）などの漢詩文集には、多くの中国文人の唱和や書簡などの内容が含まれているが、いままで殆ど検討されていない。そもそも本稿で合わせて検討すると考えたが、紙幅の関係で今後の課題としたい。

注一七 水越耕南と來日した中国文人と交わした漢詩文や手紙（尺牘）が水越耕南編『翰墨因縁』二冊（一八八四年刊）

に収録されている。今までこれについて柴田清継氏と蔣海波氏の一連の研究があった。両氏の論文は、それぞれ関西文化研究叢書十二『東アジア三国の文化―受容と融合―』（二〇〇九年）、『武庫川国文』第七二号、七三号（二〇〇九年）、『日本語日本文学論叢』第五号（二〇一〇年）、『武庫川女子大学紀要』第五七号（二〇〇九年）、五八号（二〇一〇年）に掲載されている。合わせて参照されたい。

The Association of the Kanshi Poets of Harima and the Chinese Poets in the last stage of the Edo Period and the Meiji Era —The focus of Kono Tetto and Kameyama Unpei

SHI Xiaojun

日本幕末明治時期播磨の漢詩人與中國文人的交往
—以河野鐵兜、龜山雲平為中心

石曉軍

本稿是有關江戶時代後期（幕末）及明治時代前期日本播磨地區（今兵庫縣西南部以姫路市為中心的區域）的漢詩人與中國文人之間交往關係的一個初步考察。

本稿首先通過對《鐵兜遺稿》等傳世文獻以及新發現資料《林田敬業館河野鐵兜筆行草六曲屏風》中有關記載的檢證，探討了幕末播磨國林田藩（今屬姫路市）藩校敬業堂教授河野鐵兜（1825-1867）與清末中國浙江省平湖縣乍浦的文人沈浪仙（沈筠1802-1862）之間鮮為人知的詩文交流關係。試圖以此揭示下述史實：即在鎖國的江戶時代，即便是播磨這樣遠離中心的區域，日本的漢詩人們仍以各種形式與中國文人保持著交流關係。

繼而又以被稱為“播磨聖人”的龜山雲平（1822-1899）為例，考察了明治時期播磨地區的漢詩人與中國文人的交流狀況。在幕末曾任播磨國姫路藩（今屬姫路市）藩校好古堂教授的龜山雲平在進入明治時期以後，在姫路興辦了書院“久敬舍（後改名觀海講堂）”教授漢學，繼續活躍於播磨地區。同時其與明治以後來日本的中國文人之間也有著種種交往和交流，但迄今為止這一方面並沒有引起研究者的注意。本文通過考察龜山雲平與這一時期來日本的中國民間文人陳慕曾（陳雨農）、胡震（胡少蘋）、衛壽金（衛鑄生）以及清朝駐神戶理事府理事官廖錫恩（廖樞仙）、黎汝謙（黎受生）等人的交往及詩文唱酬狀況，指出明治初期盛行於日本的中日文人詩歌唱酬等交流不僅限於東京等大都會，也波及到了姫路這樣的地方城市。